

春燈

11月号

昭和二十一年七月廿五日創刊 第三編 第六十卷

本報社址：東京市神田區本町三丁目一四番地 電話：二四二二 發行所：東京市神田區本町三丁目一四番地 第六十卷 第十一號

敦の句

ある朝の鴝きゝしより日々の鴝

句集『古暦』昭和二十九年

住みなれた私のふるさとのある朝の鴝の声である。

私は安住先生のこうした作品にどれほど励まされたことか。〈雨の日は雨の雲雀のあがるなり〉（『歴日抄』）も同じ。春燈叢書第二輯としてこの句集『古暦』は私の本棚の奥にあった。同年一月一日発行。頒價貳百五拾圓。表紙を開けたところに〈水仙の枯れゆく花にしたがふ葉〉と先生のおさやかな染筆がある。

山内四郎

敦の句

心騒ぐ牡丹散る刻やも知れず

句集『午前午後』昭和四十五年

花の芽立ちから散るまでの日々。その高貴な美しさに心を奪われた敦は、自分が牡丹なのか、牡丹が自分なのか、夢と現実のけじめが付かなくなったに違いない。かの「胡蝶の夢」の莊子のように。しかし、日ごと花卉に窄む力がなくなつた時、愕然として現実を直視せざるを得なかつた。眼前にない牡丹の散り際を予知した「心騒ぐ」の措辞に、牡丹への憧憬の深さが感じられる。

長谷川友子

主宰の句

西ヶ原日記 (十二)

鈴木榮子

萬昌寺鐘楼高き秋の聲

松手入吉良様鼻肩の土地の衆

爽籟や討死は吉良家小姓にも

ありの實を厚手に剥きて通夜の家
初ものなりと土瓶蒸しおかれけり
新絹のごとく撓ひて踊るかな
曆売未知のいのちを並べ見す
十年日記明日は佳き日を疑はず
数へ日を前倒しして手を空けて

犬櫓の太郎次郎の真面目

（一部「俳句界」掲載）

唐 辛 子

諸戸せつ子

霹靂の乳癌告知火蛾狂ふ
悪魔棲む乳房憎めず秋桜
われからの声きく手術前夜かな
身に沁むや明日は喪ふ左乳
麻酔より醒め胸の平らな十三夜
見舞子は雨月の傘を忘れけり
竜胆活け我が胸軽くなりしかな
胸の傷庇ふシヨールをかきあはす
オーロラの乱舞すべてを忘じけり
身ほとりに家族のありて年酒汲む

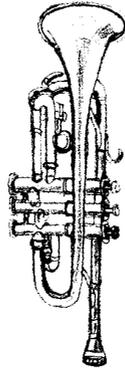
北アルプス

大室恵美子

靴紐きりり登山名簿に署名せり
雪溪に蒼き亀裂の奈落かな
山小屋に夏期限定の診療所
夏の月穂高は夕日とどめけり
落石の弾む餅や明易し
分水嶺の風に夏蝶あらし
駒草を写す砂礫に腹這へり
千仞の崖袈裟懸けに岩燕
再びは登れぬ槍やケルン積む
雲海を突き抜け槍の穂に立てり

当月集

鈴木 榮子選



○ 太田佳代子

空を見てゐるつもりなる秋思かな
後退る波ばかり見て秋の浜
研ぎし米平らに均す良夜かな
秋風や焼印薄き玉子焼
秋天に吸はるる茶毘の煙かな

○ 白神知恵子

ルノワールの女只今曝書中
瓜食みて子よりも親を想ふかな
廢線レール鏽の香たてる敗戦忌
石鹼のつるりと逃げし今朝の秋
大文字草咲けり眼鏡を買ひし日に

○ 宮地れい子

身にしむや抜かれて長き木偶の首
取りこみし洗濯物にある残暑
南瓜煮て妻たることに飽きもせず
過去ながく未来みじかし流れ星
陀羅尼助九月の雨のうす湿り

着るものに樟脳にほふ木歩の忌
盆狂言畳に温み残りをり
聞き覚えある声も又美術の秋
塩あまた鮭にかけたる旅疲
昨日見て今日見て明日見む猴酒

春燈の句

鈴木 榮子選



この傷は鯉の烏帽子のつけしもの

宮崎 前原早智子

新涼や心通へる友の文

初秋の被爆マリアの眼かな

洗濯挟みぼろぼろ崩る原爆忌

自づから身体の添ひし秋裕

棒杭の芯まで乾く澗の秋

家族みなふるさと出でず盆の月

救命具と芋茎干さるる岩屋

流星や大きく夜間飛行の灯

兵庫 伊藤 百江

とんばうの舳先にやすむ澗日和
石に木に仏に秩父の秋を聴く

ひとふりで決め枝豆の塩加減

忘却の人より暑中見舞来る

夫のために脚太にせり瓜の馬

寝冷え子の枕辺におくマンガ本

喪歸りの口の重たし月の秋

勤勞奉仕語りて尽きず大ジヨッキ

唐三彩の馬いなくや涼新た

千葉 中村春宵子

大早ダムに現はる一軒家

わが旅路一步一景秋めきぬ

魂宿る彫刻の家新酒酌む

小気味よく叩く啖呵や大西瓜

盲導犬肩いつばいの残暑かな

母の忌の白百日紅の盛りかな

錦の袈裟に纏はる秋の蝶

シヨウウィンドーの紫づくめ晩夏光

神奈川 荒井 慈

渡舟の影曳き歩む秋に入る

白雨して聖鐘響く銀座かな

台 北 林 雪江

埼玉 大澤 幸子

台 北 范 友佳女

台 北 林 雪江

余言

鈴木 榮子

りが重要な関心事である。雨乞い唄、雨乞い踊など各地にあって神仏に頼みを掛けている。神仏の靈験あらたかなことは、三囲神社の其角の「夕立や田を三囲りの神ならば」の句からも信じられていたのである。この句、晴天続きで水不足の鷺民の立場で詠んだ句だが、神社に雨乞いをお祈りして、その靈験のあらたかを感じ、帰宅するとすぐ他人に負けないような身軽な姿をして意気込んでいる様子なのである。すこしでも我が田に多く水を引き入れようとするのである。それを盗人支度という意外なことばを用いて、一句を面白く仕立てたところが心憎い。

縞馬も虎も西瓜も縞黒し

俵藤 正克

佃煮屋の日除けに太き屋号かな

久本久美子

あの大きな西瓜は日本元来のものとは思えなかったが、やはりアフリカ中部原産とのことで、西瓜のスイは唐音だそう
だ。

この西瓜の黒い縞が、縞馬にも虎にもあるではないかと
言われると、決しておかしくはないが、なにか笑える。

黒い縞を媒体として縞馬、虎が共通項として句の中に詠ま
れたのはとても稀有な詩である。

作者は美学を専攻された方である。

雨乞の帰りて盗人支度せり

高嶋 文清

日本のように稲作農耕を中心にする農家にとっては、雨降

佃島は東京中央区の南東部隅田川の河口に生じた小島とい
うが、佃島の背景にはいろいろなことがある。

先ず、埋立地であること。他の土地から移住してきたこと、
中央卸売市場に近いこと。勝鬨橋という大型船の通行のため
橋の中央が二つにはね上がる橋梁を架設したこと等がある。

佃島に佃大橋が架るまでは築地側から佃島へ渡しがあっ
た。

この佃煮屋は渡しを渡ると、その川岸のすぐ前の角にあり、
深い屋根から「天安」の暖簾というより日除のように屋号を
染抜いて軒から下ろしている。

印象的な日除であった。江戸の最後の砦のように懐かしく
大事に残したい店構えである。(以下略)